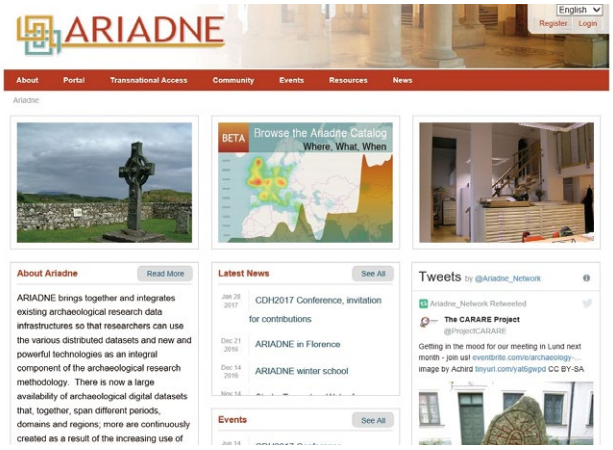
奈文研ニュース
No.70 Sep.2018
NABUNKEN NEWS
NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
https://www.nabunken.go.jp

EU考古学情報基盤ARIADNEと全国遺跡報告総覧の連携に向けて

2017年２月、イギリスのヨーク大学考古学情報サービス（Archaeology Data Service。以下、ADS）にて、考古学情報の国際発信に関するセミナーが開催されました。セミナーでは、考古学情報を国際的に共有し連携するための具体的な方法について議論しました。日本側のテーマとして全国遺跡報告総覧を主軸に議論を進行しました。全国遺跡報告総覧は、大量のデータを保持していること・膨大な利用実績があることが大きな驚きを与えたようです。意見交換において、ADSのJulian Richards教授からARIADNEを介した考古学情報の日欧でのデータ連携が提案され、現在その準備を進めています。

ARIADNEは、多国間での考古学情報を統合し、相互連携によって多くの人が情報にアクセスしやすくするシステムの構築、コミュニティの組成に取り組んでいる事業です。イタリア、イギリス等の国々、23の機関が参画しています。ARIADNEでは、遺跡の位置情報、時間情報、調査成果のリポジトリをポータルサイトにて統合しています。詳細情報を確認する際には、各国機関の専門データベースで確認することができます。情報集約をはかりユーザの利便性を確保しつつ、情報をそれぞれの機関の責任において作成・公開する分散型の枠組がうまく機能しています。またヨーロッパ内では多様な言語が使われていますが、「multilingual cross search」機能が搭載されており、用語の各国言語の対訳変換を実現しています。まさに国境や言葉の壁を超えた検索が可能となっています。



ARIADNEトップページ

ARIADNEは、European Commissionから資金援助をうけ事業推進されました。この次期計画として、ARIADNE plusが2019年３月から開始する予定です。ARIADNE plusでは、より多数の国・機関が参画する見込みであり、ヨーロッパ以外の国（アメリカ・日本・アルゼンチン）が初めて事業に参画します。本計画では、15のWork Programにテーマが細分され、様々な課題について議論されます。この多数の機関・国々が参加するARIADNE plusのスキームにおいて、日本が参画するメリットは多大です。それは、日本が得意とする分野について海外に発信し還元することで、この事業に貢献することができます。また、日本考古学の成果を世界に発信する基盤として有効に作用するとともに、各国のもつ考古学情報基盤やデジタル技術の実践例について、強み／弱みを相互補完することで、学術界全体の底上げにつながると期待されます。

（企画調整部　高田 祐一・小沼 美結）

ARIADNE　http://www.ariadne-infrastructure.eu/

全国遺跡報告総覧　http://sitereports.nabunken.go.jp

Julian Richards教授（ADS）との協議
（2018年2月27日 ヨーク大学にて）

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院北面回廊・北門の調査（飛鳥藤原第198次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、藤原宮中枢部分の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。2018年度は、大極殿院の北面回廊および北門の位置と構造の解明を目的として、大極殿の北側約1,050㎡を対象に発掘調査を実施しています。調査は2018年５月28日より開始し、現在も継続中です。

北面回廊については、戦前に日本古文化研究所が東半分を中心に部分的な調査をおこなっており、1977年には奈良文化財研究所が藤原宮第20次調査として発掘調査を実施しています。この２回の発掘調査では、礎石の下に据えた根石が遺存する状況を確認しましたが、残存状態がさほど良好ではなかったこともあり、回廊の構造や北門の位置についてはまだ検討の余地が残っています。

昨年度おこなった大極殿院東北隅部の調査（第195次）では、北面回廊と東面回廊の接続部において、礎石を据えるための穴や根石の分布を確認し、北面回廊東端の構造や柱間寸法を解明することができました。これを受けて、今回の調査では、第20次調査区と第195次調査区の間に残された未掘部分を調査するとともに、第20次調査区の北半を再発掘して、北門の位置と構造、および北面回廊の柱配置や柱間寸法の解明に取り組む予定です。

また、第20次調査では、藤原宮造営時に人工的に掘られた幅６m、深さ２mの大規模な南北溝を検出しています。この南北溝は、藤原宮の中心部分を南北に貫流しており、最下層の堆積土からは藤原宮造営にかかわる瓦片や材木の加工屑等が出土したことから、藤原宮造営時に資材運搬に用いられた運河であったと考えられています。また、この運河は出土した木簡から天武天皇の末年頃まで機能していたこともあきらかになっています。第20次調査における運河の調査成果は、藤原宮・京の造営が、天武天皇の在位中に遡ることをあきらかにした点で画期的な調査となりました。

今回の調査では、この第20次調査の際に検出した運河の北側部分を改めて詳しく調査する予定にしています。2015年に大極殿の南側で実施した第186次調査では、最新の土壌・地質調査の技術を用いて、運河機能時の流水・滞水の状況や、廃絶時の埋め立ての過程に関して、詳細な所見を得ています。今回の調査でも同様の分析を実施し、運河がどのように機能し、また役目を終えたのかについて、実態の解明に取り組むことにしています。

今年の夏は記録的な猛暑が続いており、過酷な環境のもと、体調管理に特に留意しながら調査を進めています。調査は、残暑も和らぐ９月末頃まで続く予定です。その頃には、重要な新知見をみなさまにお伝えすることができるものと思います。

（都城発掘調査部　大林 潤・廣瀬 覚）

回廊礎石据付痕跡（東から）

調査区全景（北東から）

平城宮東院地区の調査（平城第595次）

平城宮は約１km 四方の東側に東西約250m、南北約750m の張り出し部をもち、その南半の南北約350m の範囲を東院地区とよんでいます。『続日本紀』等の文献により、東院地区には皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られています。また、神護景雲元年（767）に完成した「東院玉殿」や、宝亀４年（773）に完成した光仁天皇の「楊梅宮」は、この地にあったと考えられています。

東院地区では、これまで南半や西辺を中心に発掘調査を進めており、2004 年度以降、西北部の発掘調査を継続して実施しています。2017年には大規模な井戸やそれにともなう溝を検出し、東院北部の空間利用を考える上で、重要な知見を得ました。

今回の調査では、この大型の井戸周辺の空間利用と施設の様相の解明を目的として、その東方に調査区を設定しました。調査面積は東西27m、南北42mの1,134㎡で、2018年１月22日に開始し、７月13日に調査を終了しました。

今回の調査では井戸にともなう階段や建物、被熱痕跡、土坑等を検出し、大きく２つの成果をあげることができました。

ひとつめは、今回調査区の大部分で３回分の奈良時代の整地を確認したことです。東院造営当初の整地のほか、奈良時代後半・末期の整地とみられる炭を含む土が調査区の北半を中心に広範囲に積まれていました。これまでにも東院造営当初の整地を部分的に確認していましたが、奈良時代後半以降の改作にともなう整地の確認は初めてです。これにより改作の際の大規模な土木工事があきらかになりました。

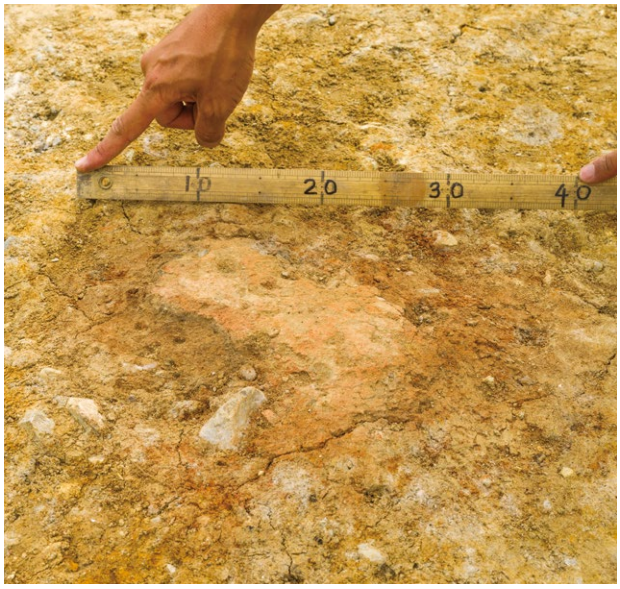
ふたつめは、大型の井戸の周辺の空間利用があきらかになったことです。第593次調査では、井戸の西方で２本の溝を建物内に引き込んで、井戸からの水を利用した様子や、溝の廃絶時には貯蔵具・調理具等の多くの土器とともに埋め戻されたことを確認しました。これに加えて、今回、井戸の東方では、井戸と一段高い場所にある建物をつなぐ石積みの階段や、調理にともなうとみられる被熱痕跡等を検出しました。

一段高くなっている井戸の東方では出土する土器も食器類が多く、火を用いて調理する厨のための空間が大規模に展開していることがわかりました。井戸の東方と西方では段差をつけて空間の利用方法が異なっていたことがうかがえます。

被熱痕跡は奈良時代の火を用いた調理の実態を示す重要な遺構と考えられます。また大規模な厨のなかでも調理や配膳等の機能に応じて、空間を分けて利用していたとみられます。文献史料から奈良時代後半の東院地区では天皇や五位以上の貴族らが饗宴をひらいたことが知られており、宮殿の華やかな表舞台を支える一端をあきらかにする重要な手がかりとなります。

去る６月17日には現地説明会を開催しました。梅雨の最中で天気が心配されましたが、幸い晴天に恵まれ、813名の方にお越しいただきました。東院地区の調査はこれからも続きますので、今後の調査にご期待ください。　（都城発掘調査部　海野 聡）

調査区全景（南東から）



井戸の東方で検出した被熱痕跡

唐三彩の玩具－最古の孫悟空像－

『西遊記』の祖型は、猴（さる）の行者が玄奘三蔵を導いて西域に仏典を求める仏教説話といわれています。ここに登場する猴行者が、孫悟空のモデルと考えられています。敦煌莫高窟の壁画等に描かれた猴行者は、白装束で頭に金属の輪をかぶっています。この金輪は、もとは白い布に通して帽子としたもので、当時の行者の定番の姿でした。

奈良文化財研究所と中国・河南省文物考古研究所が共同で研究をすすめる唐三彩の中に、頭に金属の輪をかぶる猴の玩具を発見しました。製作時期は盛唐晩期から中唐期（8世紀後半から9世紀初頭）とみられ、この時期には、なんらかの猴行者に関する話が成立していた可能性が高いといえます。

安史の乱（755～763）以降、中国の中原地域は長い争乱の時代がつづき、数多くの文物が失われました。『西遊記』の祖型である仏教説話も、日本や韓国に写本が残るのみで、中国国内には残っていません。しかし、土中に埋まった埋蔵文化財には、華やかな唐王朝が作り出した文物が、まだまだたくさん眠っていることでしょう。

（都城発掘調査部　神野 恵）

所蔵：中国河南省鞏義市博物館

出典：『鞏義黄冶唐三彩窯』奈文研史料第61冊（2003）

本庁舎竣工記念式典・内覧・祝賀会を挙行

去る６月20日、本庁舎大会議室において竣工記念式典を挙行しました。同式典には宮田亮平文化庁長官をはじめ約230名に出席いただき、本庁舎の完成をお祝いいただきました。

式典では、松村所長からご出席いただいた方々や竣工に尽力くださった方々への感謝と本庁舎の完成を一つの節目として、心新たに文化財の調査研究業務に邁進していく旨の式辞が力強く述べられました。

その後、工事概要説明、宮田文化庁長官からの祝辞および祝電披露がありました。また、多くの報道陣を前に、宮田長官ら来賓の代表者と松村所長により、天平衣装の女性たちが威儀を正す中でテープカットがおこなわれました。

式典後の内覧では、真新しい庁舎内の執務室や大極殿から朱雀門までを見晴らす眺望、温湿度管理された文化財保管庫やCT等の最新研究設備、建設時に発見された遺構の表示等をご覧いただきました。

会場を平城宮跡資料館講堂に移しておこなわれた祝賀会では、鈴木元所長のご挨拶、田辺前所長のご挨拶・乾杯の発声の他、豊城文化庁文化財鑑査官や寺社関係者からも本庁舎竣工を祝うご挨拶をいただき、盛会のうちに終了しました。

奈良文化財研究所は創設以降、過去の庁舎はいずれも既設の建物を改修しての利用であり、今回はじめて新設の建物となりましたが、発掘調査時に遺構が確認されたことから大きな設計変更をおこない、当初予定から２年遅れでの竣工となりました。移転は９月におこなわれ、10月から本格的に運用を開始する予定です。　　（研究支援推進部　津嵜 憲治）

230名を超える出席者に見守られてのテープカット

本庁舎エントランスでの展示

このたび完成した奈良文化財研究所本庁舎には、庁舎の中心となる本館とともに、南側には２階建ての小規模なエントランス棟があります。

庁舎の建替工事にともなう庁舎下の発掘調査では、西一坊大路や一条南大路の条坊側溝、平城京造営期の大規模な土木工事の跡、造営後の大路の修繕や改修の様子等が確認されました。このことを受け、庁舎のエントランス棟に、このたびの成果を紹介するための展示スペースを設けました。

この展示スペースでは、平城京造営前、平城京造営期、奈良時代の３期に分けて出土資料を展示しています。平城京造営期には、「奈良京」と書かれた木簡が出土し、「奈良」の表記が平城遷都当初まで遡ることがあきらかとなったほか、大路造成にともなっておこなわれた、斎串（いぐし）を使った祭祀の具体相を示す遺構の検出等、貴重な事例も確認されました。

また、庁舎の建つ場所は運河を埋め立てた土地であるため、敷葉（しきば）・敷粗朶（しきそだ）工法という軟弱地盤を改良する工夫や、液状化現象等の災害痕跡も検出されました。これらの事例も、土壌の切り取りやはぎ取り標本として展示しています。

本庁舎では出土資料の展示のほかに、庁舎外構に大路や条坊側溝等の遺構表示もおこなっています。遺構表示とあわせて展示をご覧いただくことで、庁舎の地下に眠る遺構を、より身近に感じていただくことができると考えます。

平城京の遺構と共存し調査成果を公開する奈文研らしい庁舎で、今後もこの場所の往時の姿をお伝えできれば幸いです。庁舎の地下に眠る世界をぜひご覧ください。　　（企画調整部　座覇 えみ）

本庁舎エントランスでの展示風景

飛鳥資料館夏のイベント「つくろう!!ミニチュア玉枕」

飛鳥資料館では、歴史を身近に、気軽に楽しんでもらう取り組みの一つとして、昨夏から子供も参加しやすいイベント「つくろう!!ミニチュア玉枕」を帝塚山大学の牟田口章人教授の協力を得て、開催しています。

玉枕は、一本の銀線でガラス玉を編み上げた枕です。阿武山古墳（大阪府高槻市）の副葬品で、十分な調査もされないまま埋め戻されたため、飛鳥時代につくられた玉枕の実物は見ることはできません。そこで、牟田口氏らは綿密な調査研究によって玉枕の復元品を製作し、飛鳥資料館に寄贈されました。

今回のイベントでは、ビーズで玉枕の編み方を体験します。製作にあたっては、わかりやすい作り方の説明、会場の雰囲気づくり、そしてスタッフの体制にこだわりました。特に、カラフルな模式図や写真を多用した飛鳥資料館オリジナルの玉枕づくりマニュアルは、「わかりやすい」と好評で、なんと１時間弱で完成させた参加者もいたほどです。

さらに、玉枕づくりをただの「工作体験」ではなく、飛鳥時代や歴史への「学び」につなげるため、イベントの冒頭で、１日目は牟田口氏による玉枕の解説、２日目は小学校低学年にもわかりやすい飛鳥時代の解説をしました。飛鳥時代の解説では、子供たちの発言も相次ぎ和気藹々とした時間を過ごせました。

アンケート結果をみてもイベントの満足度は高く、また、飛鳥資料館を知らなかった・初来館したという参加者が多数を占めました。今後も飛鳥資料館では、歴史や文化財の魅力が体感できるイベントや展示活動を企画していきます。みなさま、ぜひ足をお運びください！　（飛鳥資料館　西田 紀子）

完成したミニチュア玉枕と記念撮影

「現場でみつかる地震災害痕跡」の紹介

死傷者６千人を超えた阪神・淡路大震災から今年で23年が経ち、この間に液状化が発生しやすくなる等、被災規模が大きくなる震度５弱以上は109件発生しました（気象庁HP「日本付近で発生した主な被害地震（2018.9.7現在）」にもとづく）。この発生件数は、私たちの暮らしがいつ地震災害によって一変するか分からないことを示しています。

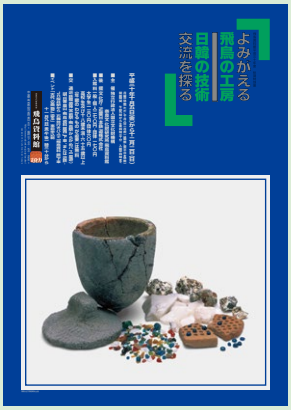
奈良文化財研究所では、2014年から国立文化財機構が推進する「文化財防災ネットワーク推進事業」、さらに地震･火山噴火予知研究協議会に「考古資料および文献史料からみた過去の地震･火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業を通して参画し、防災・減災への取り組みをおこなっています。この取り組みは、主に発掘調査にともなって発見される様々な災害の痕跡情報を集成し、そこから全国の災害履歴のデータベースを作成し、様々な防災、減災研究の基盤を整備することを目的としています。発掘調査では、災害痕跡調査が主目的になることはありませんが、近年、その情報の重要性が認識されるようになり、多くの現場から災害痕跡の認定や調査、記録方法についての質問が届くようになりました。

そこで今回、まずは調査現場で発見される地震の災害痕跡について、１）よくみられる堆積構造の名称や形状パターンと基本的な発生メカニズムについての説明や、２）調査現場で地震の痕跡として判定する際の確認すべき項目や記録方法、３）地震痕跡と誤認しやすい事例や調査担当者の目からみた地震痕跡のイメージについての聞き取りを野帳サイズに簡潔にまとめた、携帯版「現場でみつかる地震災害痕跡」をとりまとめました。埋蔵文化財調査の新しい切り口として、また未来の私たちの生活のためにも、現場でご活用願えたらと考えています。

（埋蔵文化財センター　村田 泰輔）

リーフレット表紙

飛鳥資料館　秋期特別展　「よみがえる飛鳥の工房ー日韓の技術交流を探る」



飛鳥寺の東南にあった近世の溜池「飛鳥池」の池底の発掘調査では、膨大な廃棄物層、多数の炉跡などが次々とみつかり、これまでに前例のない古代の総合工房遺跡の姿があきらかになりました。出土した木簡からは、飛鳥池工房遺跡が飛鳥の宮廷や古代国家を物質面で支えた一大工房群であったと考えられます。

近年、韓国でも生産工房遺跡の調査が進み、飛鳥と百済のガラスの生産技術の類似性や親近性があきらかになりつつあります。そこで、今回の展覧会では、膨大な出土品の中から、日韓の文化交流や技術交流の実態を示す金銀やガラス、銅製品等を中心にご紹介します。奈良文化財研究所が実施してきた発掘調査の中でも白眉と言うべき飛鳥池工房遺跡の調査研究の成果と、日韓共同研究の成果をご覧ください。　（飛鳥資料館　石橋 茂登）

会　　期：10月５日（金）～12月２日（日）　月曜休館（10月８日（月・祝）は開館し翌平日を休館）
開館時間：９：00～16：30
イベント：11月９日（金）13：30～「古代の木工技術に迫る」　※事前申込制
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561

平城宮跡資料館　秋期特別展　「地下の正倉院展 ―荷札木簡をひもとく―」

今年も平城宮跡資料館では、秋期特別展として「地下の正倉院展」を開催します。秋の恒例となった本展には、近畿圏のみならず、毎年遠方からも多数の方々にご来場いただいております。そうした全国各地から平城宮跡を訪れてくださったみなさまに、木簡にもっと親しみをもってもらいたいと思い、今年度は、全国津々浦々から送られた荷札木簡をご覧いただく展示を企画しました。

荷札木簡とは、税として都に納められた荷物に付けられた木簡です。それらには、様々な物品がみえ、大きさや形状は荷物によって異なります。また、荷札にみえる特産物、木簡の樹種からは、奈良時代の豊かな地域色をうかがうこともできます。都に届けられた荷札を多くの方々にご覧いただき、木簡を身近に感じていただければ幸いです。

（都城発掘調査部　桑田 訓也／企画調整部　座覇 えみ）

会　　期：10月13日（土）～11月25日（日）月曜休館
（Ⅰ期）10/13（土）～10/28（日）　（Ⅱ期）10/30（火）～11/11（日）　（Ⅲ期）11/13（火）～11/25（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
ギャラリートーク：（Ⅰ期）10/19（金）　（Ⅱ期）11/２（金）　（Ⅲ期）11/16（金）各日14：30～
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　記　録

文化財担当者研修（専門研修）

○古文書歴史資料調査基礎課程
2018年６月18日～６月22日　12名

○近現代建築保存活用課程
2018年７月９日～７月13日　24名

○木質文化財の科学的調査基礎課程
2018年７月23日～７月27日　８名

○地質考古調査課程
2018年９月３日～９月７日　29名

○文化的景観調査計画課程
2018年９月10日～９月14日　10名

飛鳥資料館　春期特別展

４月27日（金）～７月１日（日）　8,816名
「あすかの原風景」

平城宮跡資料館　夏のこども展示

７月21日（土）～９月２日（日）　9,205名
「たいけん！なぶんけん」

飛鳥資料館　夏期企画展

７月27日（金）～９月２日（日）　2,428名
「飛鳥のいきもの」

現地説明会

飛鳥藤原第198次調査（大極殿院北面回廊・北門）
2018年９月15日（土）　694名

本庁舎竣工記念式典（招待）

６月20日（水）　233名

■　最近の本

○馬場 基『日本古代木簡論』　2018年６月
吉川弘文館

○海野 聡『建物が語る日本の歴史』　2018年８月
吉川弘文館

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2018年9月